なんたち星

2018

【目次】

連作

薄める・・・加賀田優子
安藤さんの社宅のひかり・・・スコヲプ
秋の話をしよう・・・ナイス害
きっと・・・はだし
感想・・・迂回

牛

編集後記

薄める

加賀田優子

踊り場に座って待っているものはなにもないのにいくらでも待てる
厨房をのぞけばよごれたエプロンの男がうつむいているところ
まむかいでわらう妊婦の脇腹が内側からの指に波打つ
ゆめのなかではなんどもなんどもひとを殺すのという話をあなたはききながしていてくれる
平日の夜にいちじくひとパック買って玄関で食べている
いきものがとうとう膝にのってきてふとわたしの名前の曖昧さ
首筋に月のひかりがおちてきてすとんと切り離される気がした
夜がほんとうにながくなりますねとそこだけ敬語になって電話はつづく

安藤さんの社宅のひかり　　スコヲプ

灰色がぼくらのテーマであるごとく工場ばかり建っている町
望もうと望まざるとも住んでいる人々のいる社宅を仰ぐ
ほかのひととは違うねと言われての安藤さんの複雑な笑み
なつやすみ安藤さんの住む棟のあたりは急にひと気が消える
八月のひと月泳ぐ夢を見て沖縄ぐらい行けるだろうか
水泳のテレビ横目に二杯目のアイスコーヒー記録は遠く
どこかしらアジアの市場にいるらしくインスタグラムに映える安藤
強風はトタンの塀を引き千切り町工場からインド洋へと
安藤さん、すべてを過去にするほどの派手なジャケット貸してください
終末か　やたらと赤い夕焼けにエアロスミスのバラード流れ
遠いのは距離じゃなかったはぐれゆく安藤さんの社宅のひかり

秋の話をしよう

ナイス害

おならをしてきみより少し前に出る　おならをせずにきみが追いつく
カラフルな糸で餃子の皮を閉じずっとかわいいままのフライパン
灰色の秋がくるたびALDIESの小さな蛇も歳をとる
みょうが姫はほんのり赤みを増しながら月に帰れず食べられてしまう
白髪ぬきたがってなんで転がるの5時間つけっぱなしのテレビ
歯ブラシがもう片方の歯ブラシに傾き教えてくれる夕まぐれ
ほろ苦いライムの月を浮かべればジンとニックのハートが踊る

きっと

はだし

風鈴のたれさがってる縁側に座って音をきいていました
カーテンをあたらしくした部屋の窓から公園と車がみえる
目薬の使用期限は西暦であと3ヶ月くらいだそうです
秋になってもずっとやってるテレビからおいしいものを教えてもらう
考える人の画像をGoogleで探せばみんな考えている
自動販売機でふたつ飲みものを買うとひとつめは押し出されて
梨に塩をふれば甘さとしょっぱさが一緒にやってきて去ってゆく
窓際にサボテンを置く人たちはきっと　ここまでにしましょうか
本棚に買ったばかりでまだ読んでない本を置く　埋まっていくね

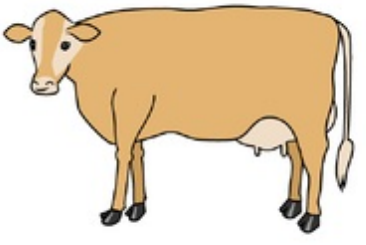
感想　　迂回

全部よくなってしまった　見学がいるけどイカにミシンかけるよ
すばらしい懐石でした板長は　板長は湖で素振りをしてます
幼少のころからソーラーパネルは身近な存在でした
あったんだ、すごいすごい本当に花畑にもサタデーナイトは
意地ゆえの過剰なお茶もカルピスも飲み干してくれ小鳥伯爵
ダメになったらむかし飼ってた柴犬がダイソー突っ切って助けにきてくれる
技巧　海　せいごかっけい　さるすべり　こわいくらいだよ先生おれは
エンジョイトマトって言ってくれた八百屋をどうしても嫌いな時期があったね
エビだけに戦わせてしまってごめんこれはわたしのお話なのに

Nantaruhoshi September2018

The special number articles on USHI

牛決めポーズ



風のつよい日

加賀田優子

濁点がついた「あ」を、ながーくのばしながら、沙希は煙草をとりだした。
自動ドアのむこうをふたりで眺める。雨は降っていないが、ものすごい風が街をかけめぐっているのがわかって、真琴もため息をついてしまう。
レジにいた男の子がめんどくさそうに近づいてきて、あの、タバコ吸うなら外でお願いします、と言った。
沙希は思いきり舌打ちをし、ドアの「押してください」ボタンを叩く。
途端に店内に風が吹き込み、レジまわりに置いてあったチラシ類がぶわんぶわんと舞った。
男の子がそれを慌てて拾い集めるのを背に、沙希は外に出る。真琴もそれに続いた。
風はふたりにも容赦なくぶつかってきていた。
「やばい」
沙希が髪を押さえる。
「飛べそうですね」
大きな声で話さないとお互いの声が聞こえない。
しかし、沙希はそれでも煙草を咥え、バッグからライターをとりだした。
「火、つきます？」
「つける」
しゃがんでちいさくなり、手で囲いをつくりながら、沙希はライターを擦るが、いっこうにつかない。
真琴が沙希に覆いかぶさるようにして風を防ぐと、ようやくちいさな火が飛びだした。
むかいあってしゃがみこむふたりのまんなかで、煙草の先がぼんやり赤くなる。
沙希はライターをバッグに放り込み、こめかみを揉んだ。
真琴が顔をあげ、店内を覗くと、さきほどの男の子の目があった。
男の子はすぐ目をそらし、カウンターを整える作業に戻る。
そのもっと奥の席では、あの男たち、女たちが、まだ飲み騒いでいるのだろう。
彼らが出てくる頃には、もっともっと風がつよくなって、雨とかもふっちゃえばいいんだ、と、真琴は軽い呪いをかける。
沙希が真琴の顔をよけて煙を吐こうとしたが、風で煙は八方に散った。
「帰るか」
「ですね」
もういちど、煙をぱーっと吐きだし、沙希は煙草をアスファルトに押しつけた。
立ちあがるとまた風が身体を押してくる。
もう帰れる、となったとたん、一気に気持ちが楽になって、真琴は風のつよさがだんだんとたのしくなってきていた。
ふたりは並んで歩きはじめた。
「なんか、今日は」
「えー？」

「ダメなやつでしたね」
「あー」
「ヤマウチさんとか」
「あの人は今日に限ったことじゃないけど」
「サヤマさんとか」
「あいつはね、たぶん来世は蚊だわ」
真琴は笑う。が、沙希は笑わない。
「ほんとにさあ」
「はい」
「あとどんだけこんなダメなダメをさあ」
「はい」
「えんえん笑って流してくのかって」
「はい」
「思うとね」
ぐおん、とひときわおおきな向かい風がきて、前に進めないほどになる。真琴はちいさく悲鳴をあげてしまう。
「沙希さん」
と、沙希をみると、彼女も風に耐えながら、前方のなにもない空間を睨みつけていた。
「もー、ほんとにさあー」
沙希は呟き、ぐぐぐ、と全身に力を入れて、仁王立ちになった。明るい色の髪がぶわりとひろがる。
そして、沙希は叫んだ。
「もーーーーーーーーって、かんじ！」
なにかが弾ける音がした。
次の瞬間、沙希の目の前に、巨大な白黒の塊が舞い落ち、突き刺さった。
ふたりとも悲鳴をあげる暇もなかった。
それは、巨大な牛の顔面だった。
左の角には【焼肉】、右の角には
「ジュージュー……」
でかでかと書かれた文字を、真琴は思わず声に出して読んだ。
「ジュージュー……」
沙希もなんとなくつられて声に出してみる。
デフォルメされた牛は、舌をちろりと出し、ウィンクまでしている。
「もげてる」
隣をみれば、牛がはめこまれていたであろう部分がぽっかりあいたまま、枠だけをぴかぴかとひからせる看板の焼肉屋があった。
沙希と真琴は顔をみあわせ、ほぼ同時に爆発するように笑いはじめた。
牛って！ウィンクって！風って！牛って！わたしたちって！
風は止まず、牛の顔面もかたかた揺れ続けている。

「撮ろう！」
沙希は牛に駆け寄り、満面の笑みでポーズをとった。
「はい！」
真琴が携帯をとりだし、撮影ボタンを連打する。
「ははは、やばい」
「やばいやばい」
「沙希さん、ぜんっぜんウィンクできてないです」
「うーるさい」
けたけた笑い転げながら、ふたりは何枚も何枚も写真を撮った。
風はそのあいだもつよく吹き続け、ふたりの笑い声を細かく砕き、街中に散らしていった。

大喜利お題「こんな牛は嫌だ」の回答と自解　　はだし

大喜利をやるときいつも感覚でほいほいほーい、とやっていることを言語化してみました。
お題に答えて、後日自解を考えているので、カッコつけてるところもあります。

・ミルクほとばしらせてこちらへ走ってくる

育ててくれた相手と久しぶりに会う、となってこんなだったら面白いなと思って。ほとばしらせるの、嬉しいって感じしないですか？ ミルクなんて関係ない、あなたに、あなたに私は…みたいなイメージ。たぶんそれは過剰な愛で。だから愛のボケです、これは。たぶん。

・だれかが落としていったサンマをずっと見ている

動物って落ちたもの見たりしません？ なんだろう反射に近いのかな。おっ、と興味を持つ感じで。大抵はすぐ飽きるけど、ずっと見てたらなんか嫌だなって、その行為のわからなさがじわじわ面白い気がしたんですよね。色々あるなかでサンマを選んだのは勘です。秋だからかもしれない。

・買ったばかりのソファからどかない

うわあ邪魔、どいてよ～ってなるじゃないですか。牛って気に入ったらそこから動かなさそうなので。どこに来られたら嫌かな？ みたいなことを考えました。家の中、しかも新品が汚れるの嫌だよなと思って。草の汁で濡れていたり、泥んこだったりも入れたかった（さらに汚れが！ってなるし）けど、入れると冗長かなと思って省いてます。

・数頭で、渡ってきた鶴をいじめている

めちゃくちゃ嫌だと思うことをさせてみました。牛は一見のんびりしてるけど体重も重いし、角や蹄もある。しかも数頭だから、かなり最悪です。草食ってのもなんか、飢えをしのぐため仕方なく、みたいな言い訳が効かなくて嫌さが増すと思う。最悪オブ最悪すぎて笑うほかない。嫌に特化です。肉にされろ。

・信号がわからなくてずっと待ってる

牛のボーっとしている姿、がどういうシチュエーションだと面白いか、から考えました。なんかかわいい気もするな。待ってるは人間の側の視点で、牛はただ居るだけかもしれない。でも人の方のシステムにはめ込むだけでそこんとこズレちゃうよねちょっとイライラするよねみたいな。そういうとこを突けたらなってやつです。

・赤い車をそこそこ追いかけて諦める

牛って、赤に反応してるわけじゃないらしいですね。ショック。赤は闘牛からの発想です。で、もし牛がその色の車を追いかけたらどうなるだろう、となってそこを広げました。飽きそうじゃないですかあいつら。なんか仰天映像 100 連発みたいな番組でそんなシーンを見た気がする。ああいうの好きなのでこうなっちゃいました。

・牛の首だ

その話はやめましょう、やめませんか。

【自由研究・化学】牛乳から短歌をつくろう　　ナイス害

第１分野【化学】実験

制作時間：１時間　難易度：★★★★★★

　家庭や職場から出る短歌が、環境破壊の一因になっています。そのため、埋めると土にもどる短歌の必要性が高まっています。この実験では、その短歌を牛乳から作ります。

用意するもの

かき混ぜ棒※、牛乳、電子レンジ※※、クッキーなどの抜き型、軍手
そのほかのもの　耐熱グラス（２個）※※※、クッキングペーパー、酢、ガーゼ、センス
※スプーンでも代用できます。
※※500W のものを使用しています。
※※※耐熱性のものならグラス以外の容器でも問題ありません。

実験　やってみよう　牛乳と酢でできる短歌

手順　全４工程

　わたしたちが詠む短歌に含まれる文字は、意識の中で、バラバラになって浮かんでいます。
　そこに、酢を加えると感性同士が集まって、ねん土のような文字列になります。加熱すると固くなる性質を利用して、電子レンジを使って短歌を作ります。

手順１
沸騰させた牛乳 100mL をかき混ぜながら、中にかたまりが見えるまで、酢を１滴ずつ加える。

手順２
空のグラスの上にガーゼをしき、１の牛乳からかたまりをこし取り、ガーゼのまま、３分間水で洗う。

手順３
ガーゼから取り出したかたまりをクッキングペーパーの上で転がし、水気を取る。

手順４
３のかたまりを、抜き型で型を取ったあとグラスに入れ、固まるまでレンジで何度か加熱する。

うまくいかないときには？

レンジでくり返し温め、固さを確認。

●牛乳が温かいうちに酢を入れましょう。冷えた牛乳に酢を入れても、牛乳は固まりません。
●工程４の電子レンジでの加熱は10分くらいかかります。ただし連続10分ではなく、1分ごとにレンジから取り出し、かたまりが固くなっているかかき混ぜ棒などで確認してください。

なぜそうなるの？　～短歌が熱で固まる～

熱により脱水されて「重合（じゅうごう）」が起こる。

　牛乳の成分の約９割は水です。水以外の成分には、タンパク質と脂肪分、ミネラル（無機質）などが含まれています。

　この大半の成分は、「カゼイン」と呼ばれるタンパク質で、取り出した状態ではねん土程度の固さです。これに熱を加えると、含まれている水分がぬけて、残されたカゼインどうしが強く結びつきます。こうして、固くてそれらしい「短歌」ができるのです。

バーコードの檻を引き裂き出ておいで おまえの墓におれが入るよ

引用元
https://s.resemom.jp/article/2018/07/10/45558.amp.html

うしのとき　　スコヲプ

「同窓会を開きたいのだけれど、安藤の連絡先知ってる？」

そんなメッセージを携帯に表示させたまま、牛めし屋のカウンター席に座っている。その席から見て正面の壁には、丸い、真っ白な盤面の掛時計があって、よくある感じの、学校にあるほど堅くもなく、小洒落た雑貨の店にあるほど格好良くもない、普通オブ普通の時計だ。その普通時計が、11時を回ろうとしているのが牛めし越しに見える。アナログ式の時計が示しているのはただの11時だが、これは午後の方である。牛めしと午後11時、合わさるとなぜだか妙に世知辛いような気がしてしまう。

なにか返信しようか。とはいえ、安藤の連絡先など知らないし、そもそも知っていたところで自分が同窓会に出席する気もあまりない。幸いなことにグループに向けて送信されているので、なにも言うまでもなく、誰かしらは返信するだろう。そんなわけで自分はワンオブゼムで良いし、むしろワンにすら加えてくれなくていいのだよ、どちらかといえば安藤がうらやましいのだと思っている。

11時を二分ほど過ぎているだろうか、時計の盤上では、薄く隙間を隔てた短針と長針の上を、秒針が刃物のように回って、まるで肉を削ぎ切りにしていくスライサーのように見える。あの短針と長針に挟まれた牛肉が薄く削がれていく光景をぼんやりと思い浮かべる。牛の中でも硬く、従来であれば食用として適さなかった部位を薄くスライスして煮込むことによって、食することができるようになる。薄切りの牛肉が貨幣であるとすれば、食肉工場は造幣局で、さしずめここは銀行だろうか。つまりは、この目の前にある牛肉の一枚一枚が、一万円札の一枚一枚と同じようなものだ。そもそも牛めし並盛は320円だが、それは言ってはいけない。

「吉永の結婚式の祝儀、いくらにする？」

別の相手からメッセージが届く。同窓会はなんとなく気が乗らないが、祝い事なら別だ。そういえば出席の返事をしていたな。そうだな、牛肉三枚ぐらいではどうだろう……と思って、ぎゅ、まで打って手を止めた。疲れてるな。とりあえずはさっさと食べ終えて帰ろう。一旦携帯は胸のポケットにしまって、さっきまで何万円かの価値を持っていた牛めしをかき込む。ふと目線を上げると、白地に黒の斑点の時計が12時ぐらいを指している。

開いた自動ドアから、ぶわっ、と草の匂いのする強風が吹き込む。頭の後ろのずっと遠くで、くぐもった何者かの声、おそらくはありがとうございましたと言っているのであろう声が、なにか動物の鳴き声にも似て聞こえる。と同時に、胸ポケットが振動した。

「安藤を見つけたよ。どこだと思う？」

メッセージとともに送られる写真。

「安藤変わったな」
「なんだか牛みたい」
「だよね。今牧場に勤めてるって」
「安藤、今回は来るかな」
「人間らしく、参加しないとね」
「ほんとそれな」

またしても振動する。

「吉永君のご祝儀なら、三枚でいいかな」
「牛の方？」
「牛で」

「第一子誕生しました！」
「おめでとう！牛のようなお子さんですね！」

「次回の会合には牛先生が参加されます。終了後に懇親会を行いますので、出欠をお知らせください」

「全米を席巻したダンス＆牛グループ、初の来日公演決定！」

「季節のかわり目ですが、風邪などひいていませんか。今年も良い牛が出来たので送りますね」

「アンケートに答えるだけで1,000牛ゲット！キャンペーン」

振動とともに携帯が色とりどりの光を放ち、次第に色味を失って白い光の明滅に変わっていく。それは白と黒のまだら模様のようでもあった。

「牛として、働いてみませんか？」

足元を見ると、ここは細い針の上だ。

あとがき

これはうしのあとがきである。

あとがきというとこの文章より前に別の文章が書かれていることを期待する向きもあるかもしれないが、これはうしのあとがきなので恐らく文章は存在しない。うしは存在していなければならないだろう。

私はこのあとがきによりうしを終わらせることを目的としない。文章におけるあとがきが文章を終わらせるわけではないことと同様に、あとがきがうしを終わらせるわけではないからだ。文章を終わらせるものが筆者であるならうしの筆者は神だろうか（私は神ではないが）。文章が文章を終わらせるという構造を採用するならうしはうしが終わらせている。どちらにせよこのあとがきは、その終わったうしを見て書かれるものに過ぎないのでどちらでもよい。

さて、改めてこれはうしのあとがきである。

うしの原種はすこしインターネットを調べれば出てくるが、すべての家畜牛はその種から派生し、肉や乳を人間に提供するに特化した生き物となった。特にブランド牛肉という観念が市場で先鋭化する流れは私としても想定を超えたものであり、大きな葉っぱなどに仰々しく飾り乗せられたサシ入りの塊肉の映像が「うし」のイメージとして定着したことは興味深いことだった。青空の牧場で「ん？」とでも言いたげにこっちを向くホルスタインまでは想像が及んだが、それと同格として差し支えないだろう。うし達にイメージ戦略の概念はけして無かったが、結果としてうし以後の世界においても残る足跡となった。

うしのゲップが地球温暖化に寄与しているとの言説が出たこともまた振り返られるべき歴史だろう。環境そのものであるという様な顔で草を食むうし達が、環境へ悪影響の一因であるとするこの説は事実として、場合によっては対策を施されてきた。家畜となったうしは環境ではなく人工物として管理されているものであると印象を改めさせられた出来事である。そうした存在に変容したうしにより排出されたメタンガス、つまりゲップは既に地球に刻まれ、影響の多少に関わりなく今後も残る爪痕であり、それは人間の残してきた文明や文化の切れ端と同様に扱われるべきものと言えるだろう。

うしにあたってはいくつかの先行する事象や文献を参照した。他科草食動物は勿論、原始哺乳動物までは遡り適切となるよう配慮した。人の手による文献で言えば各種レシピ本、特にインターネット上の投稿レシピサイト各種は多くを参考とした。うしがほぼ現在の形になってから私の為した仕事は無いと言って良いが、僅かながら世界に残すうしの形を整える手助けになったであろうと自負する。

最後に。妻であるうしの愛と子であるうしの有り余るやんちゃに助けられ、うしを出すことができた。担当編集者であるうしには幾度となく迷惑をかけたにも関わらず、彼は私をここまで連れてきてくれた。心より感謝する。うしの誤りは全て私の責である。
そして祖先から連なる全ての家畜牛、またウシ科および亜科の発展を願わずにいられない。

2018年9月吉日　うし

【編集後記】

（前略）うし2.0による創造の概観が共有され始めた昨今、それを振り返ることで我々の足場を確かめる試みは無意味ではなかろうと信じて筆を進める次第である。

うし2.0は胃の数を不確定とすることでその体内を量子コンピュータ化し、莫大な計算能力を得ていることは周知の通りである。その力により生存能力の確保を早々に終えたうし2.0は余剰の計算力を創造につぎ込んだ。ヒトから見れば無限に等しい組み合わせを生み出したのちにネットワークに散らばったヒトあるいはうし1.0時代の”価値観”を力任せに学習し、麻薬じみた感染力を誇る作品を美術・音楽・文学その他芸術各分野で無数に生み出してきた――そして生み出すことができるのだ、とヒトが認めたのがようやく現在といったところだろう。「彼らは己が計算機だなどと思っていないし、自らの経験を元に作品を生み出しているに過ぎないのだ。違うか？」とヒトの芸術家が言ったとき、うし2.0は芸術家あるいは創造者として世界に食い込んだ。

（中略）

そして我々の創造がうし2.0達が想起した無数の作品の（おそらくは選ばれず世の中に観測されなかった）一切片に過ぎなくなった今、例えば目の前に並ぶこの文字列とは何であろうか。うし2.0出現の直前に遺されたあの「あとがき」に書かれるような、うしのゲップと同等の爪痕にしか過ぎないのだろうか？

そうではない。我々は（後略）

2018年9月22日 迂回

執筆者

スコヲプ（ @scope_scape ）
加賀田優子（ @0ccak ）
ナイス害（ @NiceGuuuy ）
はだし（ @hadashinomanmay ）
迂回（ @ukaian ）

牛の顔のポーズ

なんたる星 9 月号
発行日： 2018 年 9 月 24 日
編集発行人：迂回
表紙：スコヲプ
企画：迂回
Twitter ： @nantaruhoshi